



シエラレオネに関心を「助かる命」を救おう

毎日新聞 大阪本社 社会部
いっしきあきひろ
一色昭宏

内戦中、親と離れ離れになった子ども達が暮らすNGOの施設で
写真：石井諭（毎日新聞写真部）

今夏、毎日新聞が1979年から続けている難民・子ども救援キャンペーンの取材で、約10年に及ぶ内戦が終わったシエラレオネを訪れた。生まれた子どもの3人に1人が5歳までに命を落とす世界最悪の乳幼児死亡率、平均寿命は40歳。ある程度は予想していたが、内戦の傷跡と貧困の深刻さは想像をはるかに超えた。

世界の注目が集まるイラクやアフガニスタンに比べ、「忘れられた」存在ともいえるシエラレオネ。昨年1月に内戦終結宣言が出され、ようやく復興の道を歩み始めたが、まだまだ前途は多難だ。戦火で道路などのインフラは壊滅的な打撃を受け、NGO（非政府組織）の井戸掘り支援の取材では、市街地から30キロの道のりを四輪駆動車で3時間半かかることもあった。悲劇を繰り返さず、緒についたばかりの国の再建を確かなものにするためにも、世界はこの国に関心をもち続けてほしいと思う。

シエラレオネ内戦の悲劇を象徴するのが、反政府勢力が無差別に行った「手足切断作戦」だ。「殺さず、敵（政府側）に負担を強いる」という狙いから、兵士だけでなく多数の子どもを含む数千人が犠牲になった。

首都フリータウンのアンブティー（切断された人たち）の収容キャンプでは、今も約120人の被害者とその家族らが暮らしていた。右腕のない女の子（8歳）が水くみを手伝う姿を見た時は衝撃だった。誘拐され、腕を切断されたのは4歳。左腕だけでは、他の子ども達と同じように水を入れた容器を頭に載せることができず、体をくねらせて運ぶしかない。左腕を切断され、傷口の縫合部の痛み苦しむ少女（17歳）は、お金がないため

に手術を受けられず、病院に行っても痛み止めの薬を渡されるだけ。学校に通えず、家族が引き取れないため1人でキャンプに暮らしていた。21世紀とは思えない光景に暗たんたる気持ちになった。

1万人以上といわれる元「子ども兵」にも出会った。彼らの多くは10歳にも満たない時に反政府勢力に誘拐された。殺人や略奪を強いられ、麻薬漬けにされたり、性的虐待を受けたりした子ども達。彼らの自立支援のため、パソコン講習を行っているNGOのスタッフによると「普段はおとなしいのに、操作方法や順番など、ささいなことでケンカになる子が多い」といい、心のケアも急務だと感じた。

内戦で人口が急増したスラムでは、子ども達の遊び場も、トイレも洗濯場も同じ川。不衛生な環境で病気になるても満足な治療を受けられず、日本では容易に助かる命が次々に失われていた。



戦火を逃れスラムで暮らす少女。フリータウンのクルーベイ地区で 写真：石井諭（毎日新聞写真部）

しかし、シエラレオネに対して世界は冷たかった。フリータウンで会ったUNHCRフィールド担当官の渥美さくらさんによると、シエラレオネ事務所の2002年の予算は335万ドルだったが、実際に届いたのは252万ドル。今年は245万ドルに削られ、「それさえ、いくら届くか分からない」という。数々の悲惨な現状を見た直後だけに残念だった。国を豊かにするはずのダイヤモンド資源が内戦の原因になったのは皮肉な話だ。しかし、悲劇の拡大を招いたのは、国際社会の無関心も大きな要因だったように思う。

UNHCRの職員の案内で、内戦を逃れて来たりベリアの元兵士の収容キャンプを訪ねると、驚いたことに最近まで敵味方に分かれて戦っていた政府軍と反政府軍の兵士たちが、鉄条網の中で一緒に暮らしていた。祖国では激しい戦闘が続いているのに「特にトラブルはない」という。政府軍の元兵士は「政府は給料を払ってくれなかった。私には政府軍も反政府軍も関係ない。早く家族と一緒に暮らしたい」と訴えた。一体何のため、誰のための内戦なのか。兵士自身が目的を失った争いによって、子ども達が過酷な暮らしを強いられる現実に、やり切れない思いがした。

絶望的な場面に何度も遭遇した取材の中で、かすかな希望を感じたのは現地です。汗を流すUNHCRを始めとする国連機関の職員やNGOスタッフらの姿を見た時だ。フリータウンで帰還民にWFP（世界食糧計画）からの食糧を配給するUNHCR職員、山奥の農村で井戸を掘るNGOスタッフ……。取材の先々で住民に感謝される度に、こうした地道な援助活動がいかに彼らの命を支え、生きる希望を与えているかを実感した。

助かる命が失われているのは、シエラレオネやリベリアに限らない。日本にとってなじみの少ないアフリカだが、まずは現実を知ることから始めたい。それには各地で支援を奔走するUNHCRの皆さんと同様、私たちマスコミの責任も重いと思う。